

# 脳都物語 数枝

大村伸一

電話の呼び出し音で目覚めた。深夜をすぎていた。

(数枝くん?)

「あ。はい」

(わたしだけ?)

毛玉部長だということは電話を取る前から分かっていた。この町に来てから他に電話をかけてくる者などいない。

「はい。今月の分は昨日送りました」

(あ。そう。何?)

「砂のレシピです」

(砂?)

「ええと。脳吐相撲の土俵用の砂です」

(いいわね。売れそう)

「だといいです」

横角と脳兎理事長のぬいぐるみの型紙や、幕内力士の巨大バルーンの設計図など、これまで送ってきた情報がはたして会社の売り上げに貢献したのかどうか、数枝は知らなかった。

(なんだか弱気ね。脳吐相撲がらみなら、なんでも売れるわ)

「ええと。栄養補助食品としても売れるかもしれません」

(あら。そうなの?)

「報告書も同封しておきました」

(分かったわ)

そう言うと電話は唐突に切れた。いつものことなので、気にはしなかった。

「脳兎世界工業」に務め始めて三年がたっていた。毎月、何日なのか決まりはないが夜、毛玉部長から電話がかかってきて、状況を説明しなんらかの成果を報告しなければならない。

脳都での生活が長くなってくるにつれて、元いた地方の訛りが消えて脳都弁とも言われる標準語で話すようになり、この頃では毛玉部長の訛りも聞き取りづらくなっている。部長も同じなのだろう。話を早く切り上げたくなるのは仕方が無かった。

毛玉部長と話をするとその後はなかなか眠れない。もうあの会社に戻りたいという気持ちはないが、それなのになぜこんな仕事を続けているのかといえば、それは金のためだ。両方の会社から払われる給与はそれぞれは薄給だが合計すればばかにならない。ただ、収入が二倍に増えれば課税は三倍になり、勿論、正直に税金を払うわけなどないけれど、増えているのか減っているのかもわからなくなりかけているその金がかこの生活を維持させている。ということは都会で暮らしていけるほどには収入は増えているということなのだろう。ただ、毛玉部長の声を聞くと、その夜だけは、日頃隠している思考が誰かに知られ

てしまうかもしれないと不安になり、眠れなくなる。

脳兎世界工場のロゴである頭蓋骨から脳のはみ出したうさぎが、柵を飛び越えていく数を数え続け、千二十三匹まで数えたところで眠ることを諦め、海までドライブすることにした。車は脳兎世界工業の量産車、通称ヘップバーン。どうしてそんな名前なのかは分からない。色は黒だった。社員割引が効いたので半額で手に入った。定価は企業秘密なので、それで本当に儲かったのかどうかははっきりしない。

脳都ではどこに向かって走っても一時間以内に海にたどり着く。海岸には脳が頭蓋骨からはみ出したような姿をした魚やその脳をむさぼり食う習性を持ちそのままの姿で死に絶えた蟹の死骸がたくさん落ちている。生臭いにおいは脳のにおいなのだろうか。そういえば「脳」と「海」という文字は似ている。その一方で「脳」と「#蠟」という文字も似ているのだから「海」は「蠟」でできているのかもしれない。海に近づくにつれて、車の窓から車内に流れ込む大気は熱く溶けた蠟のにおいがしていた。

砂浜の入り口には看板が立っていて「この先徒歩」と書かれていた。海にまで行きたかったので車を降りると、車がひどく喉が乾いたと言うので、冷えた林檎ジュースをグラスに注いで与えた。車の給油口はすこし形をゆがめて巧みにグラスからジュースを飲み込んだ。飲み干すと車はゲップをひとつ吐き出してからエンジンが停止した。メカのことはよく分からないが、その唐突なところから車は気を失ったようにみえた。ゲップはハンドルの横から聞こえたようだったが、給油口からでたのだろうと思う。確かめると「林檎ジュースは与えないでください」と給油口の蓋の裏側に小さな文字で書いてあった。こんなことでもなければ、給油口の蓋の裏側など見ることはなかったはずだ。これも製造元、つまりは脳兎世界工業の手口なのに違いはない。桃のジュースなら大丈夫だったと思う。桃には油を溶かす性質があるので、車にとっての衝撃も小さいはずだった。どうして桃にできなかったのだろうと、後悔しはじめると海の干潮が始まり、そこは海ではなくなった。

そんな夢を見たので翌朝、車が動かなくなっていた。フロントガラスが青灰色にかわり、細かい輝が入っている。これではドアも開けられないだろう。自転車で行こうかと部屋の天井にぶら下げてある自転車を降ろしてはみたが、ペダルが蠟で固められていて、一ミリも動きはしなかった。そういうわけで数枝机は歩いて工場に向かった。海に近いこの地方では、金属製品はすぐに錆びて膨れて壊れてゆく。数枝の住居は工場のある脳都島区ではなく、海を挟んだ七穂区にある。毎日、二つの区を結ぶ第七脳兎大橋を車で渡っている。渡るのに車だと二十分かかる。第七脳兎大橋の車道の下には歩道が作られていて、歩いて通勤することは可能だ。それでも歩けば、歩く歩道を利用しても一時間はかかるだろう。

橋を渡り始めて三十分、中間地点のあたりまでたどり着くと、脳都島の森の中に立つ銀色の塔の先端が見えてきた。満月の夜には、塔の先端が月に触れそうに見えるが、それほど塔は高く、おそらく世界一の高さだろうと工場長は話していた。世界一だとしても、脳都がそれを公表することはないから、観光客はいない。数枝は歩くのをやめて、橋の欄干にもたれ、その塔の姿を眺めた。脳都島全体を覆う黒い森の真ん中から鋭く空に突き刺さる塔は、何度見ても現実とは思えず、合成写真のように感じる。たぶん細部が分からないからだろう、塔が遠くにあるのかすぐそこにあるのかさえ分からない。じっと見ていると頭がくらくらして吐きそうになってしまう。

突然、塔の姿を遮るように、上の車道から大きな影が音も立てずに落ちてきた。それは

目の前をかすめて下の海の方へ落ちていった。最初、カラスの群が襲ってきたのかと思って身をすくめ右腕で頭を守ったが、もちろんカラスではなかった。何なのかを確かめようと橋の欄干に手をつき見下ろすと、海面はあまりにも遠く、まだ沈んでいなかったがそれが何なのかはっきりとは分からなかった。しばらく見ていると、今度は本物のカラスが急降下してきた。カラスは海に向かわず、橋柱の途中に停まった。捨てられたものの中に、狙いが逸れて橋柱に引っかかったものがあったようだ。カラスはすぐには接近せず距離を置いて様子を見ていた。その間に、捨てられ橋の途中にひっかかっているものの正体がわかった。猫だった。死んでいるらしく、カラスが本気でつつき始めても猫は身動きしなかった。海面に散らばったものも猫だとすると、その数は百体以上だろう。どの猫も海の波に揺られるだけで、もがくものはいなかった。すべて死んでいるというわけだ。海面にもカラスのチームが集合し始め、猫の姿はカラスの羽根の陰に隠されていく。橋柱にいたカラスは死体を食べつくしたらしく、姿が見えなくなっていた。カラスは閉じることのできない猫の口からくちばしをつっこみ、舌、喉、そして内臓の順番で啄ばんでゆく。海水を吸い柔らかくなった猫の皮を身体の小さいカラスが奪い合い引きちぎり食べてゆく。島の周囲を巡る潮に流され沖合に遠ざかる前に、カラスは猫の死骸を一体残らず食べ尽くしてしまった。

水中に沈むには猫の死体は軽すぎ、海面にとどまり続ければ死骸は海面で腐敗し海から疫病が広まるだろう。たとえカラスが始末してくれるにしても、今の季節、海に猫を捨ててよいという許可はでていないはずだ。死んでいる猫も、生きている猫も、海に捨ててはいけないはずだ。違法な投棄をした車を確認しようと車道を見上げたが、猫を捨てた車はもういなかった。車は脳都島に向かう車線を走っていたから、島に着いたら、通報しなければならない。



五十人あまりの力士が立っていた。土俵俵が彼らのまわりをぐるりと取り囲み、勿論、背後の土俵は見えなかった。先頭に立っていたのは脳兎理事だった。まわしはつけていなかった。浮世絵美人を描いた水色の浴衣を着ている。その後に東の鬼兎横綱と西の角錐玉横綱が並び、そのさらに背後にはよく名前を知らないが顔はよく知っている力士が折り重なって並んでいる。五十人あまりの力士が並ぶほど広い土俵を見たのは初めてだった。左右の膝に手を触れて、声を揃えておうと掛け声をあげ、それから右手を膝に添えたまま右足が揃って上り始めた。土俵の上で四股を踏むのは何度も見たが、こんなに大勢で踏むのは初めてみた。脳兎理事がいいものを見せようと言って連れてきてくれたんだった。右足が勢い良く踏み下ろされた。べしという音とともに土俵に足がついた。こんなに大勢で踏んだのでは土俵が崩れるだろう。そう思ったが、これくらいではなんともないと言っていた理事の言葉を思い出した。それから理事には一度もあったことがないはずだと思い出した。土俵に電話の呼び出し音が鳴り響いた。土俵を修理する係からの電話だった。理事が用意していたのだろう。まわししかしていない力士が電話をどこに持っていたのだろうか。理事が浴衣のふところに隠していたのだと思った。理事長は電話など聞こえないかのように四股を踏み続けている。誰が持っているのだろうか。誰も持っていない電話はいつまでも鳴り響く。せつかくの土俵入りがだいなしだ。電話を誰かとめてくれ。どうして誰も止

めないんだ。土俵が崩れ始めるぞ。ほらもう崩れていた。土俵が崩れていた。ほらみろ。崩れてもう土俵は平たい。電話がなっている。土俵から電話の音になりひびいている。ああ。そうだ。これは夢だ。これは夢だ。

目がさめると電話はまだ鳴っていた。時計は朝の三時半だった。勿論、毛玉部長だが、こんなに早朝に何の用だろう。

「はい」

(わたしだけど)

「何でしょうか」

(・・・いつもの連絡よ)

いつもにしては朝早すぎるような気がする。

「先週、送りました」

(あら、もう一月くらい何も届いていないわ)

「脳吐砂を固めた土俵形のクッキー百五十個です」

(ああ。あれは二ヶ月くらい前にきたわね。連絡がないから妙だと思っていたのよ)

船便では時間がかかりすぎると遠回しに言っているのかもしれない。

「トラック便にしましょう」

(頼むわね)

電話は切れた。

★

地下への階段を降りて行った。滅菌されていることを示す白い色に塗られた廊下とドアは、入る者を拒絶しているように見えた。監視装置は見当たらない。色彩でセキュリティを確保するのだと工場長は説明していたが、その意味はわからない。通気ダクトから遠くで赤ん坊の泣いている声が聞こえた。赤ん坊は大勢いて誰かが泣き止みかけると他の誰かが泣き始める。同時に何人もの赤ん坊が泣き続けることもある。声はどの方向からも聞こえた。通気ダクトはどこにでもあるからだ。同じフロアーに育児施設があるのだろう。

廊下には数メートルごとに頑丈なドアがあり、押してみると鍵がかけられている。ドアノブはなく内側からしか開かないのだろう。下の階に降りるエスカレーターがこの階に三基あることは壁のフロアマップに描かれている。地図では、エスカレーターはどれも離れた場所にあり、その中間地帯は雲の絵によって隠されている。歩けば三十分はかかるようだ。確かに、一階降りるだけで一時間はかかった。三階降りたところで、通路の光景はどの階も何も違いがないと分かった。迷子になる前に引きかえしたが、地表に戻るまでにまた三時間かかった。

翌日、工場に出ると工場長に呼び出された。工場長の部屋には壁がなく、隣の機械室とそこで働く作業員が見えた。作業員達は機械の操作に夢中で、工場長を振り返る余裕は無い。枠だけのドアを開けて部屋に入ると、電話をかけていた工場長は受話器を置いて鍵を出し、これは昇進だと強調しながら、私の担当が地下二階の第二生産区画に変わったと伝えた。

「それから」と、工場長はついでのように「区画長ということになる」と付け加えた。受

け取った鍵は第二生産区画の親鍵で、確かに緑に塗られていた。

「第二生産区画では何を作っているんですか」

そう尋ねると工場長は行けばわかると言って握手を求めた。その手は乾いていて、迂闊に握りしめれば発火するだろうと思えた。

★

毛玉部長との会話は次第に困難になっている。

(数枝くん?)

「毛玉部長ですね」

(三ヶ月ほど連絡がとれなかったけど、状況はどうか)

「そんなになりますか」

(最後は脳吐相撲が始まった日だったでしょう)

「ああそうでした。両横角はどちらも全勝です。少し退屈な展開になってます」

(相撲のことはどうでもいいの)

何か苛ついているような口調だった。会社から脳都に電話をかけると、電話代だけでもかなりの額になるから、それを気にしているのだろう。

「去年、地下二階工場の区画長になりましたよ」

(それは聞いた)

少し腹を立てているような口調を聞くと、毛玉部長の胸を思い出す。身体の形がはっきりと分かるような少し窮屈そうなスーツをいつも着ているので、尻と乳房の大きさが際立って見える。何のためにそんな服を着ているのか数枝には分からなかったし、理由を聞いたこともなかった。

(報告が中断してるね)

考えてから応えた。

「工場の入り口には警備員が立っていて、そこから地下二階の工場に行くには三十分はかかります。エスカレーターが三基あり、それらは離れた場所に作られているからです」

(ええと。それがどうしたの)

「私が区画長室にたどり着く頃には、部下達は全員持ち場に着いていて、機械が動き出すのを待っています」

(だから?)

「もう一年になりますが、私は自分の部下の顔を見た事がありません」

(私も部下とは三年くらい顔を合わせていないわ)

そんなことは当然だというように毛玉部長は言う。

「それは私のことですね。それならお分かりだと思います。部下の顔も知らない私に、彼らが何を作っているかなど分かりようがありません」

確かに、数枝は毎日部下の誰もいない控え室に隣接した区画長室で一日を過ごす。作業員は全員熱心に働いていて、この二年間、生産量は地下の全工場区画の中で常に三位以内に入っている。おそらく来月の再編成で数枝はより深い階の区画長に昇進するだろう。そうすればますます自分の部屋にたどり着くまで時間がかかるようになり、部下とのつなが

りが希薄になる。もしかすると深い階の区画長には専用のエレベーターが提供されていて、そんなことにはならないのかもしれない。昇進してみなくては分からない。



塔は日時計になっていて、塔の先端の影が脳都島を一日かけて一周する。数枝は決まった時刻に同じ角度で塔の先端の影を見ながら工場に入る。丁度、門を通過する時に車は光から影の中へ移動する。一日の仕事が始まるはずなのに、まるで一日がそこで終わったような気がする。この工場に配属されてから毎日塔を見ていながら塔を訪れたことはなかった。塔に行きませんか。工場長は長い顔をさらに伸ばそうとするかのように自分の顎の先端を引っ張りながら、左手で強く引っ張りながらそう言った。三年前のことだった。入るのに許可が必要ではないのですか。数枝が尋ねると工場長は、脳都の住民は年に一度、希望の日を選んで塔に登ることが許されるのだと言った。工場長は数枝が脳都に住み始めて半年経ったことを知っていた。数枝はいざというときに、この工場長を裏切ることができるだろうかと思った。

銀色の塔は都民の間では「脳都タワー」と呼ばれている。正式な名称を数枝は知らない。工場長は知らないとは言わなかったが、脳都ではそんなことに興味を持つべきではないと諭した。「脳都タワー」は観光に訪れる場所ではないため、工場長と数枝の他に塔の通路を歩いている者はタワーの職員しか見当たらなかった。エレベーターを動かすために発電機の組み込まれた自転車のペダルを踏む人足を二人雇い、最上階の五メートル下まで辿り着くのに五時間かかった。工場長と数枝はそれぞれ角砂糖を一つずつ、人足の口に投げ入れて自転車を離れた。都会では、五時間で得られる対価などそれくらいのものであった。塔のそこからは紫色のイルミネーションに輝く七名市の高層ビルが、海を挟んで眺められた。雲は消えて、下の方を旋回するお掃除カラスさえ見えていた。

「あれもうちの製品だって知っていますか」

工場長の言う「あれ」がカラスだということを理解したのはそれから三ヶ月もたってからだった。



カラスは嘴を羽根の肩で拭い、満足したのか口を半分開いたまま話した。

「ここは長いのかい」

処置されたカラスは死ぬことはないが、時間を理解できなくなるようだった。

「もう三年になるかな。早く帰りたいよ」

カラスは駐車場の中央に停められた真っ赤なジープを見つめ、数枝には興味などないように顔を背けていたが、話は聞いていたようだった。

「ここが一番さ」

カラスは何も理解してはいないのだろう。他の場所に行ったことなどあるわけがなかった。

「他の場所のことを知っているのか」

数枝の質問に、しばらくの間、首をかしげるだけで、何も応えなかった。

「勿論だとも」

くちばしを空中に振り上げ、二度痙攣させたあと、カラスはそう応えた。「他の場所」に関する記憶は工場の記憶装置の底のほうにあったのだろう。

「世界で最も食料の多い町が脳都だ。脳都島だ」

そう言って飛び立つと、辺りにいた十一羽のやや小柄なカラスも後を追った。羽根のきしる音が駐車場に響いた。

★

工場で働き始めた頃は、他の作業員の言葉がまったく聞きとれなかった。同じ言葉を使っているとは思えず、途方にくれたが、身振り手振りでなんとか生活することができた。それでも半年すぎる頃には、生活に支障はなくなった。その間、工場長が通訳兼言語教育係になってくれていた。

「地方では脳都語に触れる機会がまったくないからな。だが、脳吐相撲の力士の言葉はもっと分からないよ」

力士が話をするところなど、テレビ中継でも放送されることはない。工場長が冗談を言っているのかそうでないのかは、確かめようもなかった。

「脳都タワーにはどんな人が住んでいるのですか」

大きな窓から入る太陽光でまぶしいほどの食堂で、所長に尋ねた。所長は、何も聞こえなかったように彼の質問を無視して丼から麺をすすった。麺にからまるねっとりした紫色の液体が苦そうだった。

★

帰宅すると留守電に毛玉部長の番号が入ってた。メッセージはなかった。日中に電話をしてくるとは急用だったのだろうか。折り返し電話をしても、誰も出はしなかった。

★

第四区画長になっても、地表から直通のエレベーターはなかった。地表から区画長室にたどり着くまでに二時間はかかった。区画長室から作業場に入ると、作業員達は必死に機械を操作している。区画長がいるから働くのか、いなくても働いているのか、数字の上では区別はつかない。第四区画の報告書には、一万二千とか一万七千という数字が書かれていて、それが生産される封じ糸を示していることは知っていたが、長さなのか重さなのかはどこにも書いていなかった。

機械と機械の間や歯車の届かない隙間に猫が住み着いている。白猫、黒猫、茶猫、トラ猫、三毛猫をよく見かけたが、紫色やオレンジ色の猫も少なくはない。第四区画だけで数十匹の猫が飼われていた。三ヶ月に一度、太った女性の担当者(名前はアミナベだと書類に書かれていた)が訪れ、ある程度歳をとった猫を回収し、生まれたばかりの子猫を置いていく。機械の振動を吸収して育った猫は高く売れるんですよとアミナベと名付けられた女は言った。\*「機械仕掛けの猫」は、脳都駅や脳都空港の売店でよく見かけた。あれが

こんなふうに育てられているとは思ひもしなかった。猫が甘えるように鳴くと、女は鳴いた猫の耳の後をくすぐった。

毎日の猫の面倒は、区画長秘書という名札を胸につけた男が見ている。数枝が猫に近づこうとすると、猫と数枝の間にその大きな背中で割り込み、決して触れさせない。区画長秘書の最優先の仕事が猫を守ることだとでも言うようだった。区画長秘書は「岩軟二名」という名前の名刺を持っていて、最初に会った時それを渡してくれた。猫以外のことについては人なつこく、自分が脳吐相撲の大ファンであり子供の頃は力士になりたいと思っていたくらいで、脳吐相撲のグッズをたくさん作っているこの工場に勤められて本当に光栄なのだと言を飛ばしながら話した。「虚蟹」などと口にしようものなら、初日から昨日までの取組みのすべてを一人で演じてみせただろう。ここだけの話ですよと言って、ポケットの中の封じ糸と針をそっと見せると、二名は秘密を打ち明けた子供のように照れた。



第六区画では、機械よりも猫の数の方が多かった。廊下に残されたたくさんの猫の足跡はもう珍しくない。作業員は白く滅菌された長靴を履き、廊下を歩く時猫の足跡を知らず知らずに消す。たくさん消せば手当がつくのだが、何故その手当をもらえたのかはつきりと分かってはいないはずだ。作業員も毛深い者ばかりが選ばれていて、働いているのが猫なのか人間なのか、もう数枝には分からない。猫の餌は近海で穫れたまぐろや蟹や貝のたぐいで、大きな鍋に放り込み、火を加えるわけではないがたつぷりと脳吐塩をふりかけてかき混ぜるだけだ。食餌を作るのは秘書の「紅苔鱗」の仕事だが、それぞれの猫にあてがわれた餌皿に配るのは作業員の当番になっている。その当番が新人に廻って来ないところを見ると、重要な役目なのらしい。その食餌を猫は好き嫌いも言わずに食べる。最後は皿を舐めてきれいにしてしまうところを見ると、好物なのだろう。ときどき、当番の作業員が猫の餌を手にくっつけて自分の口に流し込んでいるのを見かける。そんなことをするときはいがい、口に入れる前に脳吐塩をたつぷりふりかけている。当番には猫の餌を横取りする特権が与えられているので、誰もそれをとがめない。

第六区画の生産品は「番付表」に違いなかった。脳都に来てもう八年になるのに、数枝は脳都の文字がまだ読めない。それで、番付表に何が書かれているのかまでは判然としなが、力強い文字を見ればそれが力士の名前だということは分かる。脳吐相撲についても、以前の区画の秘書からいろいろ話を聞いていたので横角の「虚蟹」という文字だけは分かった。どの猫も番付表に気づくと、すこしにおいを嗅ぎはするがすぐに興味を失ってどこかに行ってしまう。

住居にはもう半年くらい帰っていない。毛玉部長との連絡はもう取りようがなかった。



第十七区画には作業員は四名しかいなかった。時間になると手に手に大きめのハサミを持ち、順番がまわってくるのを待つ。手持ち無沙汰の一人二人はハサミを閉じたり開いたりして刃をすり合わせ良く切れそうな音を響かせる。区画長は彼らの名前を報告しなくてはならないのだが、数枝は作業員を区別できず名前が分からない。やがて作業機をつない



でいる通路の上をお尻を叩かれて猫が歩き、担当者に近づく。担当者はまず猫の耳の後やあごの下をくすぐり、猫を安心させる。そして、猫の身体を膝の上に抱きおろすと、一瞬の間にハサミを閉じ、猫の尻尾を切り落とすのだ。猫は尻尾を失ったことも気づかず、作業機の左側にあるダストシュートに放り込まれる。鳴き声をあげることはない。尻尾はというと、作業機の右側の大きめのバケツに積み上げられてゆく。

バケツが一杯になると回収作業担当が空のバケツと交換してゆく。バケツの中の尻尾は一時間に一度やってくる回収車が運んで行く。

★

第二十区画の区画長に任命するとき工場長は、君ほど短期間で昇進を続けた者は初めてだと賞賛した。数枝の顔は強ばっていた。この調子で昇進したら、来年には工場長だのと付け加えたが、そう言う工場長は数枝の顔を見ていなかった。

★

勤務階の廊下でカラスを見たのは初めてだった。六羽のカラスが何かに群がっていた。

「こんなところでお仕事ですか」

数枝がそう声をかけると、リーダーがゆっくりと頭をあげ、左目で数枝を見据えながら答えた。

「ああ。最近はこんなところにも来なくてはならない」

他の五羽は数枝を気にすることもなくお互いの羽根を重ねるようにして何かに頭をつつくんでいた。数枝はごくろうさまですと言いながら通り過ぎた。

★

懐中電灯の丸い光を追いかけてしばらく歩いた。その光が室内灯のスイッチをみつけると工場長はうれしそうに叫んだ。

「ここが一番下の区画」

工場長は素早くスイッチを入れた。灯りはブロックごとに順番に点灯していった。光がフロアの中を駆け抜けて行くように思えた。他の階と違い、フロア全体が一つの区画になっていて、壁で仕切られてはいなかった。そして、作業機もそこに座る人間も猫もいなかったし、機械さえみつからなかった。ただ床と幾つかの柱だけだった。

「君の机は後で届くようになっている」

そう言う工場長はさっさとエレベーターのある方へ歩き去った。黄色い太い線で縁取られたエレベーターの扉が近くの壁に見えた。

エレベーターが上の階に移動し工場長がいなくなるとフロアの灯りはすべて消えてしまった。これでは一番下の区画は工場などではなく何も生み出さない牢獄のようだと思えた。とっくに産業スパイだと知られていたのだろうか。昇進だと言われていたが、あれもこれもすべて数枝をこの場所に誘い込む罠だったのだろうか。そういえば工場で作るにはふざけた品物ばかりだった。踏押山の右手のレプリカなど飾りにもなりはしない。脳吐塩を固めた石鹼で何を洗うというのだろうか。よりもよって封じ糸で作った草履など履け

ば足が傷だらけになるだろう。どう考えても商品としての意味などないものばかりを作らされていた。なるほどつまりこのまま死ぬまでこの地下室から外に出られないということだろう。

机を運んで来るのなら、その作業員にまぎれて、地上に戻るチャンスがあるはずだ。正体がバレてしまったのだから、もうここにいる理由はなかった。故郷に戻り商売を始めるだけの蓄えも得ているのだし、もうここにいる理由はなかった。毛玉部長もここに居続けるように命令したりはしないだろう。ああ、故郷に戻った後にはそんな命令はできないといくらでも言い訳はできる。

これまでは、ここでの蓄えで故郷に戻れば商売を始められると思っていた。だがそれは難しいのかもしれない。毛玉部長と言葉が通じなくなっているということは、あそこに戻ってももう誰とも言葉が通じないのではないだろうか。故郷の言葉を忘れるなどということがあるとは思えないが、万が一そうならどうしようか。そうだ。通訳を雇えばいい。脳都と故郷の両方の言葉を使える秘書を雇う事にしよう。そうすればすべてがうまくいくだろう。

数枝はそんなことを考えて待っていたが、いつまで待っても机が運ばれてくることはなかった。

エレベーターがあるのなら、エレベーターで脱出できるだろう。しかしエレベーターの扉だというその黄色のペンキで縁取られた四角は近づいてみれば壁に描かれたただの絵でしかなく、開くわけもなければ勿論、エレベーターなどなかった。工場長はその先にあるエスカレーターで戻ったのだろうか。エスカレーターで脱出しようとそこまで戻ってみたが、エスカレーターはどれも下りになっていて、途中まで登ることはできたが、登るにつれて動きが早くなり、上の階に到達することはなかった。

★

それから灯りがつくことは二度となかった。

★

暗闇の中では眠っているのか起きているのかもわからない。

★

どこか遠くで二度羽ばたきを聞いた。カラスの羽音だったのだろうと思う。二度でなく三度かもしれない。もっと何度も聞いていたかもしれない。

カラスなどどこにもいなかったのかもしれない。

★